時とともに・・・・・・・・

ラッキーライン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
時とともに・・・・・・・・

【Ｎコード】
Ｎ６４１３Ｒ

【作者名】
ラッキーライン

【あらすじ】
香奈は花森中学の２年生。ある日、大嫌いな陸に学校の裏山に呼び出されたのだが・・・・・・いきなり、へんなじいさんに異世界へつれさられ香奈は姫と呼ばれ陸は恋人の王子だという。いったいこの二人はどうなってしまうのか……

［firstchapter］『timebeginning－時の始まり』

時空が狂い・・・・・・・・・・・・・・空間も狂い・・・・・・・・・・・・・・・・・もうこの世界は朽ち果ててしまった。

『・・・・・さん。私、あなたと離れたくない・・・・・・・・・・』

『・・・・・・だめだ。この世界はなんとかなるがおまえがここにいるのは危険だ。おまえは別のところで・・・・・』

『いやっ！！！いやよ！！』

私はめいいっぱい否定した。が・・・・・・・・世の中はそんなに甘くはなかった。

『おまえだけでも無事でいてくれ・・・・』

『いや・・・・・・・・・・・・・・・』

声も半ばに私は異界へ飛ばされてしまった。しかも、記憶を消し、子供の姿で・・・・・・・・・・

私がさみしくないように。私が悩まないように。なにより私が生きていけるように・・。あの人なりの精一杯のやさしさ・・・・・。それがどんなに悲しいか・・・・・。私は遠ざかっていくあの人に最後の力をふりしぼりこういった。

『いつかまた逢う日まで・・・・・・・・・どうか無事でいて下さい・・・・・・』

ああ。神様。貴方はなんて酷いのでしょうか。もっと、長く・・・

もっと、ずっと・・・あの人のそばにいたかった・・・・・・・・

・・・・

私たちまた、逢えるのかしら・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・

［ｆｉｒｓｔｃｈａｐｔｅｒ］『ｔｉｍｅｂｅｇｉｎｎｉｎｇ－時の始まり』

どーも（＊。ー。）ｖラッキーラインです！やけに、短いと思った方正解です。実はこれは初めのあらすじのようなものです。次回をお楽しみ～！

No1　redline timecross～赤い糸は時を越える～

「は～い、今日の授業は終わり～～☆」
「ありがとうございました。」
ああ。むかつく。なんだよあの教師は。鬱陶しくてたまらない。
ここは、花森中学の2年A組の教室だ。今ちょうど、国語の授業が終わったところだ。しかし、改めて思う、なんだあの教師は。小向　凛という新人教師だがとつてもなくブリっ子で言い回しが甘ったるい。よく教師になれたものだ。
「おい、香奈！！ちょっと帰りいいか？」
ん？この声は私が世界、いや宇宙で一番嫌いな奴・・・・・・・桜羽　陸の声だ。
「なんの用？私忙しいんだけ・・・・・・ってちょっと放してよ！！」
断ろうとしたが断る前に腕をつかまれ、どんどん引っ張られてしまった。

「なんなのよ！！いきなりこんなとこに連れてきて！！」
私が陸に引っ張られてきた場所は、学校の裏山だった。
「それは・・・・。ちょっと、大事なことをいうために。」
「は？大事なことってなによ！！」
「えっと、それは・・・・・・・。」
「早く！！ねえ、なに？」
まったく、急いでもらわないと私が両親に怒られてしまう。ほんとに早くしてもらいたい。」
「・・・・。俺、おまえのことが・・・・。」
陸が何かを言いかけた瞬間、
ががっがががっががががっがががっがががっが・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。
何か大きなものが動くようなしたかと思うと地面の中から仙人のようなおじいさんが現れた。・・・・っては？！なんで、地面から人が！？なんだこりゃ？！驚いたのは陸も同じだったようだ。顔がものすごくひきつっている。うわ〜。滑稽だわ。
「わたくしの名前は蛇穏（たおん）。新しく、王になったものだ。さあ、姫わたくしと国へもどりましょう。」
「は？姫ってわたしのこと？」
わけが、わからない。わたしが、姫なんてこと絶対にない。たしかに、赤ちゃんのころおばさんに拾われて育ったけど・・・・・・・ありえない。
「おまえ、さっきから聞いていればなんだ。そうやって、香奈をさらおうとしてるんだろ！」
「なにをいっている！この人は我が国の花蓮（かれん）姫であるぞ。」
花蓮・・・・。その名前どこかで聞いたような・・・・。なんでだろう。思い出せない。
「は？香奈が姫なわけないだろこの野蛮娘が。」

んなわけない。無論、野蛮でもないが。
「ああ。もうよいっ！本当は姫だけを連れて行く予定じゃったがおまえも連れていく。」
そう、蛇穏が言った瞬間ものすごい勢いの風が吹きその勢いで私は意識を失った・・・・・。

ここはどこだろうか。女の人と男の人が見える。女の人の方は薄ピンクのドレスに身を包み頭には小さめの冠をしている。冠にはきれいな細工がしてあり真中には大きなサファイアがある。男の人の方はタキシードを着ていてこちらも小さめの冠をしている。冠にはやはりきれいな細工がしてあったが真中にはサファイアではなく大きなアメジストがあった。どこかの城のお姫様と王子様だろうか。なにか、笑いながら話している。
『花蓮姫。今日も会えてよかった。』
『ええ。途中でお父様に見つかりそうになって大変でしたのよ。』
花蓮姫・・・・・。さっき、あの蛇穏が私に言っていた名前だ。そういえば、どことなく私に似ている。
『それにしても、錬(れん)さんはよく抜け出してこれたわね。』
『いやぁ。けっこう大変だったんだよ。』
どうやら、男の人の方は錬という名前らしい。なんだか、顔が陸に似ている。
『まあ。大変だったこと。』
そういって、二人は顔を見合わせてほほ笑む。とてもとてもうれしそうに楽しそうにほほ笑む。すごく、平和な風景だ。しかし待てよ。

もし、いやほんとにもし私があの人だとすると錬は陸なのか？いや、
そんなはずはない。絶対にないだろう。
『うふふ。』
花蓮姫がほほ笑む。つられて、錬もほほ笑む。
ひっそりと隠れる、闇があるとは知らずに・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・。

ねえ、早く私を思い出して・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・。

No2grandfatheaescape～おじいさんからの逃亡～

「姫様・・・・・姫様！！」
私の真上でだれかがしきりに叫んでいる。だれだろうか。
「花蓮姫様！！おきてください！！」
花蓮・・・・・・ああ、あの夢に出てきたお姫様のことか。たしか、陸にそっくりの王子もいたなぁ・・・・・・・・
「あ～～～～～～～～～～！！！！！！！！！なんでここであいつが出てくんの！！」
思わず私は飛び起きた。だが・・・・・・・・・・・・・・目の前の景色がいつもと違った。豪華な調度品に豪勢な壁紙まさしくお屋敷の部屋だった。しかも、真ん前にいるのは・・・・・・・
「たっ蛇穏！！」
私たちを引きずりこんだ蛇穏だった。
「おお！！花蓮姫様！！起きましたか！！よかったよかった。」
「あの、あなたは・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」
「私はこの国の王の蛇穏。十三年前に異世界へ飛ばされてしまった、花蓮姫様を連れ戻しに異世界へ出向きました。」
「そ、そう・・・・・」
聞きたいことはいろいろあるがまあいい。ベットから立とうと思った矢先、ベットから鵜鳴き声が聞こえた。化け物？！そう思って見てみると・・・・・・
「ぎゃ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～！！！！！！！！」
なんと、陸が寝ていたのだ。ということは気絶している間いっしょに寝ていたのだろうか。まずい。これはまずい。
「蛇穏、なんでこいつがここにいんの？」
「え？なぜと言われましても、花蓮姫とついでに錬王子を連れて来たので・・・・・・」

「なにそれ！！！！」
思わず大声をあげてしまった。すると、陸がもぞもぞと動き起きた。
「ん・・・・・なんだここ？・・・・ってなんで香奈が！！」
という声とは裏腹になんだか陸はうれしそうだ。意味がわからない。
「おお！！錬王子！お目ざめになりましたか！！」
蛇穏は陸に飛びついた。
「錬！！なんだそれ？」
「なにをいっていっるんですか？」
「おい！いきなり出てきたじじい！！ここはどこだ！！」
「そうよ。ここはどこなの？」
私と陸が問いかけると蛇穏はため息をついた。
「やっぱり・・・・・お二人とも記憶がなくなってしまったのですか・・・。まあ、いずれか思い出すでしょう。ここは、ある小国の城の中。お二人は、もともと王子と姫なんですよ。花蓮姫はこの国の姫。錬王子は隣国の王子です。二人はとても仲の良い恋人でした。しかし、闇のしもべがこの世界を破壊し始めたのです。花蓮姫は、錬王子の手で異世界へ送られましたがそのあと錬王子も花蓮姫の後を追って異世界へいきました。」
「なんだそれ？！そんな話だれが信じんるか。いくぞ、香奈！！」
「え、ちょ・・・」
また、私は陸に引っ張られてしまった・・・・・・・・・・・・。

『いたいた、花蓮姫。あと錬王子。なんだ、なかいいのか。せっかく放したのにな。まあいいや。まっててね花蓮姫。』

?3ｐｒｉｎｃｓｓ．ｐｒｉｎｃｅｅｓｃａｐｅ～姫と王子の逃亡～

「はあはあはあ。ちょっと！！陸待ってよ。」
「なんだよ！このじいさん怪しいだろ！！」
「だけど・・・・・・・・。」
「いいからいくぞ！！」
「きゃあ！！」
「まってくださいまし！！みなのもの花蓮姫と錬王子をおいかけるのじゃ！！」
ここは、異世界のどこかの国の城の庭。今私は、蛇穏という変なおじいさんから逃げている。陸にお姫様だっこされて。
「陸！！降ろしなさい！！いくら私が走るのが遅いからってなにもお姫様だっこしなくてもいいじゃない！！」
「いやだ。おまえは、俺がまもるんだから。」
「はあ？なにいってんの！おろしなさ～い！！」
こうして、私は陸にお姫様だっこされたままなんとか蛇穏からにげきった。

「ねえ、なんかみんなさけてるような・・・・・」
いま、私たちは街にいる。だが・・・・・・・・・街の人々が私たちが通る道を開けている。
「なんだよ。しんせつなやつらじゃねえか。」
「だけど、なんかみんな『花蓮様、錬様ようこそいらっしゃいました！！』っていってるけど。」
「うーん。もしかしてあながちあのじいさんのいうことしんようで

きるかもな。」
「だから、いったじゃない！！ああもう！ちょっと街の人に聞いてみる！！」
私は陸から離れて街の人に花蓮姫と錬王子のことについてきいてみることにした。
「あの～～～。花蓮姫と錬王子について聞きたいのですが・・・・・・・。」
やさしそうなおばさんがいたので聞くと、
「あら、花蓮姫様ではないですか！お会いできてうれしいですわ！……でも、何故自分たちのことを？……あ！いいですわ。おしえてさしあげましょう。」
と花蓮姫と錬王子のことを話しはじめてくれた。
「花蓮姫様はこの国の姫でした。とてもかわいらしい姫でしたの。そして、錬王子は隣国の王子で花蓮姫にお似合いな王子でした。しかし、あるものの手によって世界は闇につつまれたことによって二人は、異世界に行ってしまいました。」
「そうですか・・・・・。ありがとうございました。」
私は、ていねいにお礼を言うと陸のもとへ向かった。

「陸！やっぱり蛇穏の話は本当だったみたい。」
「マジかよ！ていうことは、俺たちは王子と姫で恋人だった。んで、異世界に飛ばされちまったわけか・・・。」
「でも、蛇穏・・・・なにも恋人だったからといって同じベットに寝かせることはおかしいとおもうのよねぇ。」
なに？！俺と香奈、同じベットで寝てたのか？くそう。チャンスを逃した。寝ている間なら・・・・・・ってなにを想像してるんだ！！落ちつけ！
「へえ・・・・・・・。」
「なんで私があんたなんかと寝なくちゃならないの。」

「あんたなんかとはなんだよ！」
俺は、おまえのことが気になってしかたないっていうのに。まあ、そんなことは今は恥ずかしくて言えないけど。
「まあ、早く城にかえりましょう。」
「ああ。」
俺達が足を進めたその時！
ガサガサ……
『お姫様はもらってくよ。錬王子。』
頭に響く少年の声がすると同時に俺は気絶してしまった。

「待ってくれ、香奈……。」

?3princess. princeescape～姫と王子の逃亡～（後書き）

どうもラッキーラインです。まずは、謝罪。夏休みだというのに、執筆が進みませんでした。すいません。基本、ケータイだと最新しずらいのでパソコンを使っているのですがついつい動画を見てしまって……。次回は、早く最新できるようがんばります。

では、また次回！

kidnapprincess～誘拐された姫～

「うん……。」
私は、目を覚ますと改めてまわりを見た。白い壁紙に白いベット。とても殺風景な部屋だった。そして……窓には鉄格子。まるで、少し綺麗な牢屋のようだ。ドアのところまで行ってみたがドアは開きそうにない。ここはいったいどこなのだろうか。考えていると、ドアが開き中に漆黒の少年が入ってきた。勿論、私のしっている人ではない。
「目が覚めたかい、香奈。……いや、花蓮姫と呼んだほうがいいね。」
少年の声は冷たく、低く闇のようだった。
「貴方はだれ？ここはどこ？どうして私がここにいるの？……そうだ！陸は？陸はどうしたの？」
私は、少年に思っていたことを一気に聞いた。
「まあ、順番に説明して行こうじゃないか。僕の名前は夜闇（よやみ）。ここは、僕の基地のひとつさ。僕は、錬王子と花蓮姫を引き離した張本人さ。…まあ、理由は今度説明するとしよう。陸……錬王子には少し眠って貰っただけだから生きてるよ。」
陸が無事だと聞いてなぜか安心したが私を誘拐した理由がわからない。いったいなぜだろう。
「僕は、世界を闇で染めたいのさ。だから、強敵のあの二つの国の結婚を避けたかったんだ。これで、わかったかい？」
「貴方……。読心術でも使えるの？それに、私はここからでなくちゃいけないの！ここから出して！」
私は夜闇に必死に頼んだ。だが、夜闇は
「だめだよ。ここから出ては。」
と言われてしまった。
「出して！お願いだから出して！」

しつこく言っていると、首にチクっとした痛みがはしり急に眠くなってきた。
「うるさいよ。しばらく寝ていな。」
この言葉を聞いた後私の意識は途切れた……。

『錬さ～ん！すいません。遅くなりました。』
花蓮姫が、桜の木の下で待っている錬王子に話かける。
『大丈夫ですよ。僕もついさっき来たばかりですし。』
『それならよかったわ。うふふふ。』
『そうだ、そうだ。今日聞いたんだが、結婚式のドレスの試作品ができたそうだから、今から見に行かないか？』
『まあ、本当？生きましょう！』
楽しそうに話している。そのうち、馬車が来て二人は馬車にのって町へ行った。

『いらっしゃいませ～。花蓮姫様の結婚式用のドレスの試作品が３着できております。こちらへどうぞ。』
花蓮姫と錬王子は、ドレスの試作品を見に服屋へきていた。
『これはピンクを貴重としていてフリルが多く豪華な仕上がりとなっております。こちらは、水色を貴重としており質素なつくり、こちらは赤を貴重としており豪華でありながらも質素なつくりになっております。』
服屋の店員は、つぎつぎとドレスをだしていく。

『どれにしようかしら。』

笑いあう二人。とても、和やかな時間がながれていった……

……。

ｆｏｌｌｏｗｐｒｉｎｃｅ～追いかける王子～

「錬王子！錬王子！しっかりしてください！」
蛇穏の声が聞こえる。なんでだろう。頭が痛い。ズキズキと痛む頭を気にしながら俺は目を開けた。
「錬王子！目が覚めましたか！」
「蛇穏、ここは…。」
「城の中です。」
「そうだ！香奈は！？香奈はどうなった！」
「花蓮姫はただいまわれわれが捜索しております。」
「そうか。……香奈、大丈夫だよな？」
「わかりません。相手はこの世界を滅亡させかけた夜闇だからのぅ。」
「なんだ、その夜闇っていうのは。」
「花蓮姫と錬王子を引くさき、この世界を滅亡にみちびいた闇の化身ですよ。」
「そんな奴じゃあ危険じゃないか！俺も探しに行く！」
「お待ち下さい！錬王子は夜闇が放った麻酔針を受け、倒れた時軽い脳震盪を起こしております。ここは、われわれにまかせて……。」
「なに言ってるんだ！香奈は、香奈は俺が守るって決めたんだ！だから、俺も行く！」
俺はベットから立ち上がりドアへ向かった。少しふらついたが大丈夫そうだ。
（香奈、香奈は俺が必ず助けるからな……！）　俺は外へ向かって走り出した。

はあはあはあ……

……

俺はさっきからあてもなく走りまわっている。香奈の手がかりがないためいくあてがないのだ。

「くそう！どうしたらいいんだ！」

俺はちかくにあった木に蹴りをいれた。

『痛いなぁ。だれだよっ！僕の足を蹴ったのはぁ！』

どこからともなく小さい少年の声が聞こえた。

「だれだ！だれかいるなら出でこい！」

『出てこいじゃないよ。いるもん。お兄さんが気づいてないだけ！』

俺は急いで周りをみた。しかし、周りにはだれもいない。まさか…

「木か？」

『まあ、当たりにしてあげるよ。僕はやさしいからね。正確に言うと、森の神、名前は碧。よろしくね、お兄さん！』

「んで、あんた俺になんの用だ？」

『うーん。お兄さんが探してる人の居場所を教えてあげようと思って……』

俺は、木の言うことを信じて聞いて見ることにした。

ｇｒｅｅｎｇｏｄ～碧の神～

「花蓮姫なら漆黒の闇の森にある夜闇のアジトにいったよ。」
碧という神らしい木がしゃべる。
「じゃあ、そのアジトはどこにあんだよ。」
疲れている俺は多少いらつきながら碧に聞いた。
「それが、この僕にものをたのむ態度？僕は神だよ？王子を地獄におとすことだってできるんだ。さあ、どうする？」
すごく、腹黒いやつだ。こいつは。俺は、しかたなく丁寧に言ってやった。
「碧様！お願いいたします！花蓮姫の居場所を教えて下さい！」
「いいよ。だけど多分口で説明してもわからないだろうし連れてってあげる。」
「マジで！」
いきなり、木が緑に光ったと思うと木の中から少年がでてきた。見た目は俺より年下のようで可愛らしい顔立ちだ。
「まさか、おまえが……！」
「そう！これが本当の僕のすがた！どう？」
「どうって言われてもなぁ。」
一見、女の子のようだなんて言えばまたなにか言われるにちがいない。そう思った俺はあえてこう言った。
「美形だな。」
「正直な王子だ。ふふっ。よしっ！案内しよう！」
狙った通り上機嫌になり快く道案内を初めてくれた、まったく、かんたんなやつだ。
「それじゃあ……レッツゴー！」
「ゴー……。」
こうして、俺と碧は香奈を助けるべく夜闇のアジトへ向かった……
……。

「うん……。」
私が目を覚ますと頭に再び激痛が起こった。
「また、頭痛がするのかい？」
「ま、まあ。」
いきなり目の前に夜闇が現れた。
「それはそうだろう。僕が無理矢理二回も魔術を使ったんだから。」
「まっ魔術……。すごいわね。この世界には魔術師までいるの？」
「それはちょっとちがうかな。この世界で魔術が使えるのは僕と……あの二人だけだからね。」
「あの二人って……まさか……花蓮姫と錬王子？」
「ああ。そうさ。だから、君も魔術を使えたんだよ。しかも、錬王子は火、花蓮姫は……。」
「花蓮姫は？花蓮姫はなんだったの？」
「花蓮姫は光。光の魔術だったんだ。闇にも負けなかったくらい強い光の力。」
「へぇ……。すごかったのね、花蓮姫って……。」
「そうだね。でも、僕の闇には勝てず異世界に飛ばされ……。」
……こうして、別人のようにいるんだけどね。」
「そうね……。」
「だから、君にはまず闇に染まってもらおうと思って。」
「闇に……？」
「そ。そのほうが錬王子に復習ができるからね。」
そう、言い残すと夜闇は部屋の外へ去っていった……。

一方、陸は……。

「おい……。まだ、つかないのか？いくらなんでも、もう１時間は歩いてるだろ……。」
「そおぉ？僕、浮いてるから疲れないし、そもそも疲れたと思ったことないからわかんないや。」
「……おまえ。いい加減にしないと火あぶりにして炭にするぞ！」
「わわわ……。それだけはご勘弁を。……でも、さすがだね。錬王子は火の魔術師だったから。」
「おいおい……。ここの世界には魔術師までいるのかよ。」
「いるっていっても……。花蓮姫は光の魔術師、夜闇は、闇の魔術師、錬王子は火の魔術師で三人しかいなかったけどね。」
「三人かよ。……でも、すごかったんだな。錬王子って。」
「まあねぇん。」
「……その言い方はやめろ。気持ち悪い。」
「はーい。ごめんなさーい☆」
「……だからやめろって言ってるだろ！」
「わわわ。マジでキレちゃった。ごめんなさい！だから、炭にするのはご勘弁を……！」
「それでよしっ！」
（偉そうなこといって……。）

「……おまえ、顔にかいてあるぞ。」
「へ？なにが？」
「しらばっくれるのかよ……。まあいい。先を急ごう！」
「イエッサー！！」
こうして、再び香奈の捜索を再開するのであった……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6413r/

時とともに・・・・・・・・

2011年10月8日13時13分発行